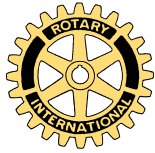


THE ROTARY CLUB OF KARIYA



Weekly



2007～2008年度 国際ロータリー ウィルフレッドJ.ウィルキンソン会長テーマ

ROTARY SHARES ロータリーは分かちあいの心

創立 1954年3月8日
承認 1954年3月30日

例会日時 毎週月曜日
12:30～13:30
例会場 刈谷市新栄町3の26
刈谷商工会議所内
事務所 TEL (0566)22-2111
FAX (0566)25-2111
メール kariyac@katch.ne.jp
ホームページ http://www.kariya-rotary.com
会長 橋本 恭典
幹事 鈴木 文三郎
会報委員長 酒部 正博

この会報は、地球環境保全に考慮し再生紙を使用しています。

第2573回例会プログラム

[当年度=15回目；当月=2週目]

2007年（平成19年）11月12日(月)

1. 例会 ……〈司会：プログラム委員会〉

- 12:28 1. チャイム
12:30 2. 点鐘 ……〈会長〉
3. 開会宣言
4. ロータリーソング斉唱…我等の生業
5. 講師・ゲスト並びにビジター紹介
6. 食事
- 12:45 7. 会長挨拶並びに会長報告
8. 幹事報告
9. 出席報告
10. 委員会報告
11. ニコニコボックス報告
12. 次週並びに次々週のプログラムの予告
(11/19) ……クラブフォーラム(ロータリー財団委員会)
卓話「ロータリー財団の役割」
講師 地区ロータリー財団委員会
委員長 深谷 友尋 氏
(名古屋みなと RC)
(紹介者 竹内 一郎 会員)
(11/26) ……休会
(クラブ定款第5条第1節(c))
- 13:00 13. 本日のプログラム
卓話 「とことん努力してこそ価値を得られるGSE」
講師 2006年度GSE派遣メンバー
亀島 深里 様
(神谷研税理士事務所所長代理)
(紹介者 兵藤 文男 会員)
14. 謝辞
15. 点鐘……〈会長〉
16. 閉会宣言
- 13:30 17. 散会

出席

会員総数 90名 出席免除 19名
出席義務者+免除者の内例会出席者
85名 欠席 19名 出席率 77.65%
前々回(10/29)の修正出席率 100%

会長報告

- 1) 幹事と岡本戡紘さんのお見舞いに行き参りました。軽い脳梗塞で2週間ほど点滴を行い明日退院の予定です。まったく後遺症もなくいたってお元気でした。
- 2) 先週土曜日に当クラブが協賛していますロータリー杯小学生サッカー大会に塚本会長エレクトに出席して頂きました。

幹事報告

- 1) 今週末は地区大会です。登録者には連絡済ですが、大会第2日パークアリーナ小牧に行かれる方で、バスを利用される方は11月18日(日)午前8時までに刈谷市総合運動公園駐車場にご集合下さい。
- 2) 木戸勝美会員が転勤により退会されましたので、会員数は90名となります。

委員会報告

●ロータリー財団委員会

年次寄附100\$は現在31名の方に協力いただいております。今後とも一人でも多くの会員のご参加をお願いいたします。

橋本 恭典



先週霜出さんのお元氣なドライブの話題がでましたので、私にも話をさせて下さい。私の場合のドライブは、多くの皆さんと同様、目的地の近くまでは公共交通機関で行きそこでレンタカーを借りてのドライブです。霜出さんも来年古希を迎えられたら是非もよりの所までは公共機関でそこで車に乗り換えてドライブを楽しんでいただきますようお願い致します。彼の場合は喜寿位までは今のスタイルかもしれませんが。

さて来年サミットが開かれる洞爺湖の西側あたりからニセコ方面はフラワー街道と言って、道の両脇が整備され初夏から秋にかけて様々な花が咲いており、ほとんど信号もなくゆったりと走れます。洞爺湖あたりから40分位でニセコに着きますが、ニセコ駅から3-4分ほど手前に白亜のモダンな田舎町にしてはずいぶん立派な建物が、蝦夷富士と呼ばれている羊蹄山をバックにして清潔な公園内に建っています。「或る女」「カインの末裔」などで知られる大正時代を代表する作家、有島武郎の記念館です。

有島は親の代から所有していた広大な農地を小作人に共有させ無償解放し、収穫の3-4割に上る小作料を無料にしその人道主義、理想主義を実践しました。戦後の農地改革後も農民たちは彼の理想を後世に伝えようと、農場事務所の一部を有島記念館とし、その後は有島の遺徳をしのぶ謝恩会が中心となって、昭和38年に有島謝恩会館が、また昭和53年ニセコ町により現在の立派な有島記念館が建てられました。中を覗きますと有島の生い立ちから札幌農学校、軍隊生活の後、ハーバード大学に学び、後に志賀直哉、武者小路実篤らと出会い同人誌「白樺」に参加して白樺派の中心人物の一人として活躍している場面が写真や原稿、手紙などで展示されております。

一通り眺めておりますとどうしても興味をひいてしまうのは、生い立ちや作品のこともさることながらその死に方です。大正12年7月8日の読売新聞に「有島武郎氏の似た死体 軽井沢の別荘に横たわる」という見出しで、有島武郎(45歳)と婦人公論記者・波多野秋子(30歳)の「軽井沢心中」として大きな反響と議論を呼んだ「情死事件」の記事が一番興味深いものでした。

波多野秋子は、東京実践女学校を卒業後18歳という若さで実業家波多野秋房と結婚、その後青山女学院で学んだ後、婦人公論で活躍した「美貌と才気」溢れる評判の記者で、同僚の編集者が、すれ違って振り返らない男も女もほとんどいなかったとか、一緒に芝居や相撲にいつでも遠くの男が双眼鏡をむけているのをよく見かけた、と記されております。また当時売れっ子ながら容易に原稿を書かなかった三大物作家、永井荷風、芥川龍之介、有島武郎らは秋子に依頼されると、簡単に承諾して書いていたようです。

二人が知り合った時、有島はすでに妻を亡くしていましたが、秋子は「夫のある身」でした。有島から秋子への長文ラブレターのなかには「あなたが私を愛し、私があなたを愛するその気持ちを如何にも打破することはできません」とあり、他人の妻との恋愛から逃れられない思いを綴っています。また、秋子から親友の石本静枝宛の遺書には「私という赤ん坊は年頃になって恋を知りました。真剣な恋を致しましたその相手が武郎だったので。」

また石本静枝は秋子からの便箋7枚に書かれた長文の遺書を公開すると共に「秋子さんといふ方は職業にかけては非常に抜け目のない如才のない方でしたが個人としての本当の心はそれはそれは無邪気な方でした。」と述べ大物作家の心中なので、作家としての行き詰まりの心中、夫との愛情のない生活に疲れた秋子に有島が同情しての心中等、様々に飛び交うスキャンダラスな噂から親友を救い出しました。

「石本静枝夫人」はのちの女性解放運動家、初の国会議員「加藤シズエ」であります。「心中した時の火消し役になってもらえるよう親友は大切にしましょう」を最後に申し上げご挨拶とします。

「とことん努力してこそ価値を得られる GSE」
2006年度 GSE 派遣メンバー(神谷研税理士事務所所長代理)
亀島 深里 様

クラブフォーラム

本日は、伝統と格式ある刈谷ロータリークラブにお招き頂きましたこと心より御礼申し上げます。



GSEは研究グループ交換“Group Study Exchange”の略称であり、ロータリー財団の事業の一つで、1965年に発足した専門職務に携わる人々の国際交流プログラムです。

プログラムで派遣された現地においては、ロータリークラブの例会及び地区大会に出席し、派遣地区(2760地区)の紹介プレゼンテーションをしなければならぬことになっていました。

今回、私はアメリカ南部のアーカンソー州(クリントン前大統領の出身地)へ4月7日~5月8日の約1ヶ月間ホームステイをしながら、様々な職業体験や文化交流をさせて頂きました。

さて、私が現地で披露しましたプレゼンテーションの内容についてですが、まず自分自身のテーマを「世界に誇れる愛知県」とし、それを念頭におきながら特に産業技術に焦点をあて準備しました。

愛知県は県内に多く分布する「からくり人形」を育んだ地域であり、その伝統技術があったからこそ、織機、自動車、航空産業などその時代時代の産業の最先端技術に結びついたのではないかと私は考えましたので、自身

のプレゼンテーションは、その産業技術の歴史と愛知県の文化とを絡め、「歴史・伝統・文化」を織り混ぜた、すなわち過去と現代を融合させたものに仕上げました。

幸い私の生まれ育った碧南市大浜地区には、400年以上前から受け継がれた、日本にたった2体しかない「乱杭渡り人形」と言うからくり人形がごございますので、それを主テーマに取り上げました。

また、現代の産業技術の最高峰とも言うべく、世界に誇れるギネス記録をもった新幹線を、プレゼンテーションに織り混ぜるためと、現地の方々が体感したことのない新幹線のスピード感を肌で感じてもらいたいとの思いから、実際ホームで、デジカメを片手にビデオをかまえました。

自分自身が最初に思い描いた構想通りのプレゼンテーションを完成させることができたのは、まずどんな状況であっても決して諦めることなく、「少しでも良いプレゼンテーションに仕上げたい」と強く思う気持ちと、もがき苦しみながらも我武者羅に必死にやり遂げた自分がいたからでした。そして、そんな私を数えきれないほどの多くの方々が支え、応援し協力して下さったからこそだと感謝の気持ちで一杯です。

そしてこの苦しくも素晴らしい経験があったからこそ、私は、人の温かさや優しさのありがたさ、そしてその素晴らしいさ、大切さを改めて実感することができました。

次に帰国報告のプレゼンテーションですが、「日本文化の伝達人」と題しまして、“心”で伝えたコミュニケーションの感動を皆様にお届けしたいと思います。

訪問したアーカンソー州は、アメリカ南部の州です。ここでは、見渡す限り地平線が続き、壮大な自然の中で私たち人間も自然の一部のような存在でした。アーカンソー到着2日目より、ウォーレンロータリークラブを皮切りに、36あるロータリークラブの内、9つのロータリークラブを訪問しプレゼン披露そして地区大会参加へのスケジュールがスタートしました。

クラブ訪問で一番驚いたことは、会長が最初から最後までたった一人で司会を務めていたということです。クラブミーティングは、7時スタートのモーニングクラブと12時スタートのヌーンクラブ半々くらいで、会場はファミリーレストラン、ゴルフ場が多く老人ホームでのミーティングも経験できました。どのクラブでも女性が多く全体の30%を占めているそうです。

最後のミナーロータリークラブは、女性が60人中38人と60%も占め、会長は勿論女性で大変華やかな感じのクラブでした。会のスピーチは常に笑いがありユーモアにあふれ、服装は大半がとてもカジュアルで皆さん大変リラックスし、心から「楽しんでいるなぁ〜」という気持ちがいつも伝わってきました。

また、ニコボックスは、会が始まってから何か喜びごとのあった人や、話をしたい人が自主的に手をあげ前へ出て行き、\$1~10くらいを入れるという形か、このような番号のくじを一人一枚貰い、会長が引き当てた番号の持ち主たった一人が入れるという何ともユニークな方法でいつも大変盛り上がりました。

私は、このGSEプログラムを通じ日本や日本の文化を紹介することによって、未来、次世代へ繋げられるような活動がしたいと願っていました。ラッキーなことに現地において殆ど突然でしたが、私には個人的にあらゆる年代の学校から訪問の依頼が舞い込んできました。私は訪問した学校などで、日本や日本の文化について説明し、実際に書道・折り紙などに直接触れてもらえるような工夫をしました。

私のアーカンソーでの1ヶ月間は、最初から最後まで順風満帆だったと決して言えるものではありませんでした。アーカンソーは、まるで日本の東北へでも行ったように大変方言がひどく、極度に自信喪失し失語症のようにもなりかけ、毎晩一人部屋でもがき苦しんだ時期もありました。GSEメンバーとしての義務感、焦りなど大変追い詰められた状況ではありましたが、極力「周りに対する感謝の気持ち、そして気配りだけは忘れないように」と心がけ、その一瞬、一瞬を大切にし、コミュニケーションを取る努力だけは決して忘れませんでした。そんな私をいつも支えてくれたのは現地の方々の優しさや、温かさ、そして、GSEメンバーであるという責任感でした。

気づいてみると、いつのまにか本当の意味での「心」のコミュニケーションが派遣メンバー5人の中で一番取れている!!と感ぜられるようにもなりました。事実私は、アメリカ人のステータスとも言えるバッジを、メンバー5人の誰よりも群を抜いて大変多く頂くことができました。これは私にとって“勲章”だと誇りに思っています。このように私は、このGSEプログラムを通じ、「コミュニケーションの大切さ」について、改めて学ぶことができたこと心より感謝しております。

この貴重な経験は、生涯かけがえのない「財産」となりました。本当に素晴らしい経験をさせて頂くことができましたのも、一重にここにいらっしゃる皆様をはじめ多くのロータリアンの方々のお陰だと、心より感謝しております。本当にありがとうございました。



米 GSE メンバーと（和服は自前です）



小学校にて（折り紙の風船を作りました）